「農村留守児童」について

三好　章

はじめに

北京オリンピックは華やかな外面を誇示して終わったが、その開催を約するにあたって国際社会に約束した人権問題や報道の自由に関しては何ら具体的な成果を見せることなく、また取り沙汰された環境問題への取り組みも、オリンピック開催時の一時しのぎであったことを露呈しつつ、中国は二〇〇八年を終えようとしている。党が民族主義を鼓吹するために巨額の資金を投入して建設したオリンピック施設の工事に、「農民工」と呼ばれる農村戸籍[1]を持つ労働力が大量に投入されていたことについて、すでに数多くの報道が日本でもなされていたことは、いまだ鮮明に記憶されている。もちろん、かれら農民工の中には単身者も多くいるであろうが、北京に限らず中国の多くの都市で問題となっていることに、かれらの子女の存在がある。これを「農民工子女」と呼ぶ。また、農民工を送り出す農村部では、父母が都市部や外国に仕事に行ってしまい、祖父母が面倒を見ているならまだしも、学齢児童だけで、あるいは学齢児童がさらに年下の弟妹の面倒をみながら生活する家庭も存在し、かれらの教育機会や教育環境はもとより、その年齢層であれば期待して当然の両親の愛に恵まれず、地域によっては二一世紀初頭からそうした環境におかれた子供たちの非行が問題となっている所もある。[2]かれらを「農村留守児童」と呼ぶ。その数は二〇〇七年初め現在、全国で五八〇〇万人にのぼり、うち一四歳以下の義務

教育段階にあたる児童生徒が三千万人以上、乳幼児を含めると四千万人に達し、農村の未成年者全体のうち二八・二九％が該当するという。[3]

農村留守児童発生の根本的な原因は、農村からの労働力流出である。そうした本来の居住地から離れて他の地域で就業するひとびとは、ハードな社会主義政策から「改革開放」政策への転換によって発生した。とりわけ一九九二年に鄧小平が行った南巡講話によって「社会主義市場経済」がもはや逆行不可能な地平に押し上げられてからは、こうした動きが顕著になってきたであろうことは、いまや論を俟たないであろう。実際、二〇〇五年五月現在、全国の「流動人口」は一億四七三五万人、省を越えて移動した「流動人口」は四七七九万人にのぼり、これを二〇〇〇年一一月に行われた第五回全国国勢調査と比較すると「流動人口」全体では二九六万人増であるのに対し、省を越えて移動した「流動人口」は五三七万人増となっている。[4] これは、ひとびとの移動範囲が拡大し、農村から省都へではなく、とりわけ経済成長が著しい沿海部の大都市への移動が統計的に表れているといえよう。二〇〇〇年の第五回全国国勢調査[5]の時点から五年間での変化であるが、状況が深刻になりこそすれ、解消には向かっていないことが理解されよう。

こうして生み出された大量の農村留守児童は、農民工子女とともに現代中国における社会格差の表現であり、そうした環境に放置された子供たちひとりひとりにとってみれば、始まったばかりの人生のスタートラインにおいて、すでに追いつきようもない差をつけられていることを意味する。実際、中華人民共和国の教育体系は、異様な平等主義が猛威を振るった文化大革命時期を除いて一貫して複線型がとられており、職業課程にいちどでも進学あるいは進級すると普通課程に戻ることはきわめて困難である。[6] 社会教育の立場から、通信課程による高等教育の学歴付与が始まってはいるが、そこで得た学歴が一般社会でどのように受け入れられているか、軽々しく評価することはできない。したがって、初等および前期中等教育段階で学校体系からはじき出されかねない状況におかれた農村留守児童は、社会の底辺部に組み込まれる将来が可能性として大きく、中国の社会問題の一因ともなりかねない。

本稿では、その農村留守児童のおかれている教育状況・家庭環境の一端を示し、基本的人権としての基礎教育が現在の中国農村においていかに扱われているかを検討したい。それによって、格差や不平等の現状が見えてくるだけでなく、その将来像もまたうかがいうるのではないだろうか。

最近の関連する研究として、特に経済成長による教育格差を地域間格差、所得格差との関係から考察した南亮進・

牧野文夫・羅歓鎮『中国の教育と経済発展』[7]、経済発展の著しい沿海地区である江蘇省のケーススタディとして阿部洋編著『「改革・開放」下中国教育の動態――江蘇省の場合を中心に』[8]、また貧困地区の状況に焦点をあてたものに保母武彦・陳育寧編『中国農村の貧困克服と環境再生――寧夏回族自治区からの報告』[9]、上海の事例研究として牧野篤『中国変動社会の教育――流動化する個人と市場主義への対応』[10]などがある。中国の研究としては、周林・青永紅等編著『農村留守児童教育問題研究』[11]がこの問題に焦点をあてて実態と対策、その効果を紹介している。また、汪明『聚焦流動人口子女教育』[12]は、農村留守児童と農民子女の両方を扱っている。農村部における義務教育の実施状況に関しては張強等『農村義務教育――税費改革下的政策執行』[13]など、農民工そのものの優れたルポルタージュとしては楊豪『中国農民大遷徙』[14]がある。

なお、中国の学校制度における小学・初級中学・高級中学は、それぞれ日本の学校制度における小学校・中学校・高校に学年として対応する。また、日本では小学生は児童、中高生は生徒、大学生は学生、と教育段階別に呼ぶが、中国では基本的にすべて「学生」であり、「児童」は未成年者、すなわち満一八歳未満の新生児から少年までを含む概念で用いられる。本稿で扱う農村留守児童とは、邦訳すれば「農村における保護者不在の児童生徒」となるであろう小学校・中学校の児童生徒の年齢層を主に考察の対象としている。また、基本的に現代漢語の用語の使用は「農民工子女」「農村留守児童」と組織や地名などの固有名詞にとどめる。

現　状

昨年一二月、旧正月を含む冬休みを前に、農村留守児童についての論説記事がウェブサイト「光明観察」に発表された。[15]それは「留守児童の冬季休暇の生活を無視してはならない」[16]と題するもので、これまで、冬休みになって農村留守児童が学校生活から離れることにより自堕落な生活に陥り、不良青年とつきあうなどから社会治安上の難題となったり、爆竹を大量に破裂させて事故を起こしたり、「重大な悲劇」となることさえあったと問題の深刻さを指摘していた。そうならないように「冬休み中の留守児童の安全にしっかりと注意を払い、適切かつ実行可能な措置をとり、冬休み中の児童の生活を豊かにし、安全教育を強化し、かれらが安全で文化的な冬休みを過ごせるよう手助けして欲しい」と「関連単位および保護者各位に呼びかけた」のであった。ここには、農村留守児童の芳しくない生活の事例として非合法営業のネットカフェ[17]で徹夜、一日中武侠小説やビデオにふけって抜け出せない、一日中玉突き

場や小さな店にたむろして賭博にふけるなどが事例としてあげられているが具体的な地域の記述はない。全国の農村で広く見られる出来事であるため、あえてそうしなかったのかもしれない。それがかえって事態の深刻さをうかがわせている。とはいえ、そうした状況に対する方策としては、上記のように精神論的呼びかけの域を出ていない。

同じく二〇〇七年一一月には「農村留守児童の学習生活にある五大問題」[18]が『人民日報』に掲載された。そこには、河南省周口市において同年一〇月一四日に開催された「留守児童写真展」[19]の様子を紹介したあと、陝西省宋慶齢基金会、陝西省婦女連合会による陝西省北部・南部各地の農村の小中学校における農村留守児童に関する調査結果が示されていた。それによると、陝西省内一二の県と区の農村小学・初級中学三二校、児童生徒二万一一〇六人のうち、父母が出稼ぎに出ている児童生徒は一万三二二六人、全体の六二・六六％にのぼっていた。そして、かれらの抱えている五大問題とは、第一に食事で、平均三三・五％の児童生徒に食事を作ってくれる人がいない、第二に病気で、約二〇％の児童生徒は病気になっても看病してくれる人がいない、第三に農作業と家事の負担で、若年どころか壮年層までが出稼ぎに行っているために残された児童生徒や老人にそれらの負担がみなかかってくる、第四に学業問題で、留守児童の大多数が困難を抱えている、第五に心の問題で、四五～六〇％の児童生徒が自分の一番大きな悩みは孤独だと答え、女子の場合はこれが八五％以上にのぼるという。もっとも、この記事では専門家の指摘として「法的に父母は子女に対する監督責任と扶養義務が課されており、学齢児童生徒がいる家庭では、父母のうちいずれかが家にいるのがもっともよいことを訴えるべきであり、父母ともに出稼ぎに出ざるを得ない場合には、事前にしっかりと面倒をみてくれる人を探して頼むべきである」とするにとどまっている。具体的な数字があがっている割には、対応に関しては一般論の域を出ていない。農村におよんでいる市場経済の波は、現金収入なくしてよりよい生活への道がないことをかれらに実感させており、それゆえ子女のまた自分たち家族のよりよい将来のために青壮年男女、すなわち子供たちの父母が、時には二親ともども出稼ぎに出ざるを得ないという矛盾した状況を前にしては、そうした専門家の指摘は、机上の空論でしかない。出稼ぎしないで済んだり、あるいは父親だけで済むなら、誰も苦労しない。

こうしたなか、状況の深刻さを認識し始めた国務院は、二〇〇七年、農村留守児童の状況を把握するため、全国婦女連合会と共同でこの問題に関する研究小組をたちあげ、二〇〇五年の一％抽出全国国勢調査の統計をもとに、全国規模での調査研究を行い、『全国農村留守児童状況研究報告』（以下「報告」）を発表した。[20]報告では、「改革開放以

来、都市と農村の経済体制改革およびわが国の近代化のプロセスが推し進められるのに従い、全国で一億四千万の農村労働力がすでに都市に仕事に出ている。こうした農民の中には、子を持つ父母が相当数にのぼり、各種の原因から、非常に多くの人が子女を農村に留めており、これによってそれが特殊かつかなり大規模な未成年の集合――農村留守児童を形成している」と、問題の原因と状況について指摘している。そもそもの原因を文革後の改革開放政策に求めるのは別段誤りではないであろうが、現在の中国の状況から考えるとあまりに一般的過ぎるともいえる。[21]とはいえ、そうした状況が社会主義市場経済論という実質的な社会主義の放棄によって加速したと見ていることは、「二〇〇〇年と比較して、二〇〇五年の農村留守児童の増加はかなり急激なものである」と述べており、常識的な判断ではあり、特に二一世紀に入って経済成長のテンポが上がっていることと密接に関連していると考えていると見て間違いあるまい。そうした、農村留守児童の状況を「党中央と国務院は非常に重視している」ものの、「総体的に見れば、農村留守児童の生活と成長との深層に横たわる矛盾と突出した問題とは、いまだ根本的な解決に到っていない」と述べている。率直な総括といえよう。

表1　年齢段階別農村留守児童の割合
（全農村未成年人口との比較）

単位：%

年齢段階	割合
学齢前：0～5歳	27.05
小　学：6～11歳	34.85
初級中学：12～14歳	20.84
高級中学：15～17歳	17.27

出所：全国婦女連合会『全国農村留守児童状況研究報告』2008年より作成。

報告では、表1のように農村留守児童の農村未成年に占める割合を年齢段階別に掲げている。

小学生段階の子供の親は、初婚年齢が比較的低い農村であれば三〇歳前後であろうから、出稼ぎでも職を見つけやすい年齢層であるといえる。さすがに高級中学段階の子供では親は四〇歳近くなり、肉体労働が中心となる農民工などでは仕事を見つけるのは次第に困難になってくるであろうから、結果的に農村留守児童の割合が下がることになる。それでも、学齢前の子供を残して出稼ぎに出る親たちの気持ちは、いかばかりであろうか。

さて、報告は全国の状況に関するものであり、地域差に関する具体的な数値はあまりあげられていない。それでも、四川・安徽・広東・湖北・重慶では小学生での留守児童が多いものの、河南・湖南・広西・山東では幼児がさらに多く、四川・安徽・湖北・河南・広東・湖南・江西では中学生以上が多くなっていることを文章の上で指摘する。[22]そうした農村留守児童が集中している省としてあげられているのは四川・安徽・河南・広東・湖南であり、この六省

表2　農村留守児童の家族構成と家族状況

単位：%

同居家族	男	女	0～5歳	6～11歳	12～14歳	15～17歳	平　均
母親のみ	22.48	22.86	16.19	21.55	27.09	29.67	22.66
母親・祖父母	10.67	10.79	19.02	9.37	6.55	5.53	10.73
父親のみ	9.46	9.43	3.53	7.49	12.58	18.88	9.45
父親・祖父母	4.29	4.31	5.96	3.97	3.34	3.55	4.30
祖父母のみ	25.72	25.39	37.98	28.06	17.42	10.91	25.56
非親族	14.82	16.76	9.33	17.50	19.31	17.82	15.72
その他	12.56	10.45	7.98	12.07	13.71	13.64	11.58
合　計	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
父母いずれかが留守	46.90	47.39	44.70	42.37	49.56	57.63	47.14
父母ともに留守	53.10	52.61	55.30	57.63	50.44	42.37	52.86

出所：全国婦女連合会『全国農村留守児童状況研究報告』2008年。

だけで全国の農村留守児童の五二%を占めているという。[23] 内陸部の諸省から沿岸部にむけて、農村の青壮年層が農民工などとして出稼ぎに出ている結果であろうことは容易に想像がつく。なお、全国的に見て、大多数の地域において農村留守児童の性別としては男児五三・七一%、女児が四六・二九%であったという。これについて理由の説明はない。しかし、同年齢の場合、女児の方が男児よりも家事手伝いなどで役に立つ度合いが圧倒的に高いことは、日本においても経験的に実感できよう。[24] すなわち、男児よりも早く成長する女児は出稼ぎ先での働き手として、あるいは父母の家事の手伝いとして、同年齢の男児より問題なく有用なのである。

次に、農村留守児童の家庭環境に関するデータがあがっている（表2）。

この表からは、父親が出稼ぎに行き母親が子供と一緒に残ることが多いものの、反対に父親が残る場合も決して少なくはなく、両親とも出稼ぎに出てしまう家庭が五二・八六%と半数以上にのぼっていることが見てとれる。しかもそれは、小学生段階の場合には六割近くまで増大する。親たちが留守の間、結局は祖父母が中心となって面倒を見ることになるが、おそらくは信頼しているであろう他人に我が子を預ける場合も、一五%前後ある。

また、このデータを年齢段階別に整理しなおすと表3と

表3　年齢段階別・性別農村留守児童家族状況

単位：%

		家族状況						
		母親のみ	母親・祖父母	父親のみ	父親・祖父母	祖父母のみ	非親族	その他
年齢	0～5歳	19.33	47.96	10.10	37.47	40.19	16.05	18.65
	6～11歳	33.14	30.41	27.64	32.11	38.25	38.79	36.32
	12～14歳	24.92	12.73	27.74	16.17	14.20	25.59	24.68
	15～17歳	22.62	8.90	34.51	14.25	7.37	19.57	20.35
	合　計	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
性別	男	53.01	53.16	53.49	53.31	53.76	50.38	57.97
	女	46.99	46.84	46.51	46.69	46.24	46.62	42.03
	合　計	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

出所：表2に同じ。

なる。

ここからは、学齢前の幼児の場合は母親もしくは母親と祖父母が面倒を見る場合が多いが、小学校段階からはそれが多様化し、それに伴って祖父母の割合が下がってくる。なかでも、幼児期においては両親ともに出稼ぎに出てしまうことが多く、結局祖父母に子供を預ける状態になっていることがわかる。[25] また、中学段階では祖父母の割合が明らかに低下するが、それはこの段階の祖父母は孫が幼児であった時より確実に年老いているわけである。もちろん、祖父母の年齢が比較的若い幼児期の子供であっても、状況は深刻である。報告によれば、農村留守児童の祖父の平均年齢は六一歳、祖母は五九歳であり、ほとんどが五〇～七〇歳であるが、五〇代の祖父は四三・一九%、祖母は四七・六四%、祖父母の教育水準は祖母よりは祖父の方がやや高いとはいうものの、義務教育制度すら存在しなかった時期[26]の中国農村において学齢期を過ごしていた祖父母は教育を受けていた方が少ない。報告には、小学校に行かなかった祖父は七四・九八%、祖母は八四・〇二%にのぼるとある。こうした数値からは、両親が出稼ぎに出たあと子供たちの面倒を見ている祖父母が、必ずしも教育に関心があるとは限らず、それどころか非識字者である可能性も否定できない、したがって孫の教育にほとんど関心を持たないという、深刻な状態にあることも想定しうるのではないだろう

表4　農村留守児童の教育状況

単位：%

教育状況		6～11歳		12～14歳		15～17歳		合　計	
		男	女	男	女	男	女	男	女
農村留守児童	不登校	3.02	2.97	0.47	0.65	0.67	0.96	1.75	1.82
	登　校	96.20	96.13	96.45	95.88	80.31	79.38	92.58	92.01
	卒　業	0.64	0.79	2.24	2.41	15.70	16.68	4.59	5.10
	修　了	0.05	0.02	0.26	0.44	1.19	1.27	0.37	0.44
	中　退	0.06	0.06	0.54	0.61	2.08	1.66	0.67	0.61
	不　明	0.02	0.03	0.04	0.01	0.06	0.04	0.04	0.03
	合　計	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
一般農村児童	不登校	3.62	3.97	0.79	1.07	0.95	1.50	1.87	1.99
	登　校	95.53	94.98	94.93	93.65	70.39	69.23	89.46	88.52
	卒　業	0.69	0.83	2.99	3.73	24.50	25.89	7.31	8.23
	修　了	0.06	0.06	0.36	0.40	1.38	1.11	0.44	0.39
	中　退	0.07	0.12	0.86	1.09	2.68	2.22	0.87	0.81
	不　明	0.03	0.04	0.06	0.06	0.10	0.06	0.06	0.06
	合　計	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

注：各項目の原語は以下の通り。不登校：「未上過学」、登校：「在校」、修了：「肄業」、中退「輟学」、不明：「その他」。なお、「肄業」は学業は修めたものの、卒業せずに学校を離れる状態で、卒業を意味する「畢業」とは異なり、学歴とはならない。「輟学」は学業半ばでの中退。
出所：表2に同じ。

か。中国の多くの小中学校で、一部都市部の貴族学校と称される所を除いて、日本でいうクラブ活動などはほとんど行われておらず、学校でやることは学業だけ[27]、したがって放課後の子供たちは放置されているといっても過言ではない。

それでは、農村留守児童と学校との結びつきはどのような状態であろうか。現在、農村においても義務教育制度のうち小学校六年間は基本的に普及しているが、初級中学さらには高級中学段階はまだ不充分である。それを両親の保護のもとに暮らす農村の未成年者との比較で示したものが表4である[28]。

表からは、留守児童ではない、すなわち両親の保護下にいる未成年と有意の差を見いだすことは困難である。数値的には、両者の差はあまり存在しないといってよいかもしれない。小学生段階では、留守児童の方が登校生の比率が高く、全体的に見ても、不登校率そのものは留守児童の方が低いくらいである。こうしたことは、父母の出稼ぎの重要な目的が子弟の教育費であることから、後述するように、問題を起こす農村留守児童が多くいるにせよ、親子関係がうまくいっている場合はきちんと通学していることが考えられる。した

がって、農村留守児童に対する社会的働きかけは、学校を通すことによって、ある程度までは大きな効果が期待可能であるともいえよう。

その他報告では、「留守幼児」が百万人以上いる省として四川・安徽・河南・湖南・江西・貴州・広東の七省があげられ、この七省で全体の六五・九七％を占めているという。また、幼児の場合、常に相手をしていなくてはならないにもかかわらず、祖父母が面倒を見ている男児は三七・三八％、女児は三八・七三％、母親と祖父母で面倒を見ている男児は四二・一〇％、女児は四〇・〇三％であり、父親単独あるいは父親と祖父母で面倒を見ていることはほとんどないという。また、高級中学段階ではすでに一人前の労働力とみなされる年頃であり、また高級中学への進学率は二〇〇七年の全国で七〇・三％というものの、[29]農村部だけをとればそれよりずっと低くなることは明らかである。それでも、在校率が同年齢の農村未成年よりも高いことは、上にも述べたように、父母の期待に応えようとする農村留守児童が比較的多いことを意味しているのではないだろうか。また、報告では一五～一七歳の農村留守児童のうち一二・五三％が就業しており、八三・一五％が土地の耕作を請け負っており、[30]個人営業主となっている者もいるとしている。[31]

報告は全国を俯瞰したものではあるが、農村留守児童の多寡に一定の地域的偏差が見受けられることを指摘しており、それが現在の中国における経済状況との関連と対応していることから、述べられている事柄は非常に理解しやすく、説得力もある。また、これは全国規模での農村留守児童に対する初めての調査であり、個別の地点を確定してのフィールドワークではないものの、状況がかなり深刻になっていることを浮き彫りにしたといえよう。

事　例

それでは、個別の事例として農村留守児童が抱えている問題は一体どのようなものなのであろうか。ここでは、四川省の農村地区を舞台とした調査をもとに実例を紹介し、学校の教員たちによる問題への取り組みを検討してみたい。

なお、ここでは二〇〇七年四月に出版された周林・青永紅等編著『農村留守児童教育問題研究』[32]に示された事例を取り上げている。同書は四川省南充市高坪区での農村留守児童の実情と教員の取り組みを整理したもので、子供たちひとりひとりが抱えている問題の深刻さとそれに対する現場の教員の献身的な取り組みの姿がうかがえる。もちろん、ことはこのようにまとめられるほど単純ではないが、農村留守児童がおかれている状況の一端を知る上で貴重な

資料である。

南充市は四川省北東部に位置し、市政府所在地と省都成都、また南方の広安市とは高速道路で結ばれ、東方の重慶と結ぶ高速道路も建設中である。市の面積は一万二四九四平方キロメートル、総人口は二〇〇一年現在で七〇九万六五〇〇人、うち非農業人口は一二一万六七〇〇人で全人口比一七・一四%という、県城以外は農村地帯という中国ではありふれた地域である。南充市は順慶・嘉陵・高坪の三区と閬中市、南部県・営山県・西充県・蓬安県・儀隴県からなり、そのうち順慶区が都市機能をにない、行政・経済・金融・文化の中心となっている。[33] 全人口七〇〇万人余のうち都市部の人口は一割弱にとどまるが、都市部とはいっても全体的に見れば広がる農村の中に浮かぶ地方都市に過ぎない。周林らの研究の対象となった高坪区は、嘉陵江中流域の東岸に位置し、南充市都市部の東部に隣接し、面積八一二平方キロメートル、人口六〇万人、三〇の郷鎮と街道弁事処二か所を管轄し、古くから四川北部の「絹織物の里」「蜜柑の里」「冬野菜の里」として知られてきた。[34] 要するに農業とそれに連関する一部手工業が村経済の根幹をなしてきたが、都市部の近郊に位置するため次第にその影響を受け始めている地域といえる。それを示すように、一九九三年の行政区画の変更で高坪区は南充市の直轄区となっている。[35]

高坪地区[36]には全体で七八か所の小中学校と幼稚園があり、児童・生徒・園児の総数は八・八一万人、うち留守児童は三・七万人余、全体の四二%にのぼり、それ以外にも学齢前の留守幼児が九七六〇人以上、留守児童の割合は明らかに増加しているという。これは、両親の出稼ぎが多いからであり、区全体の農村留守児童三・七万人のうち二親ともに出稼ぎに出ているケースが二・三八万人で六四・三%、いずれか一方の場合は一・三二万人で三五・七%。しかも、両親の出稼ぎ先が県城内であるのは三四五一人、一四・五%、南充市外は二五二三人、一〇・六%であるのに対し、省外へは一万六二七五人、六八・四%に達している。具体的には沿岸地区の広東・福建・上海があげられている。[37] このため、父母のいずれかが常に子供たちと一緒に暮らしていない場合が五一・六%にのぼるが、半年あるいは一年に一度は故郷に帰って来る者はそのうちの五九・三%、二年に一度二一・〇%、三年間帰ってきたことがない場合も一六・〇%にのぼっている。家族状況は、母親とともに暮らしている者三一・五%、父親とは四・二%、母方の祖父母と暮らす者は七・八%、父方の祖母と暮らしている者三七・六%、叔父・叔母など親戚に厄介になっている者一〇・八%、さらに父母の親友の世話になっている者五・一%、誰も面倒を見てくれない者が三%という数字があげられている。これは、先に「表2　農村留守児童の家族構

成と家族状況」に示した全国婦女連合会による二〇〇八年の「全国農村留守児童状況研究報告発布」の数字と比べると、親族の整理の仕方に違いはあるものの、大きな傾向は共通していることがわかる。さらに、全国平均の状況よりも父親の出稼ぎが多くなっている点、非親族が世話をするケースがやや少ない点などが特徴としてあげられよう。まだ、家族や親族の繋がりが強く残り、男女の性別役割分担も維持されていることがうかがわれる。

子供たちは、親たちの出稼ぎにそれなりの理解を示している。父母が出稼ぎに行くことを願う者は四五・三%であるのに対し、願わない者は二九・三二%、出稼ぎに行くことを希望する理由として家計の好転、貧困からの脱出、教育資金をあげるいっぽうで、父母がそばにいなければ自由であり、出稼ぎに行けば家にいる時よりもたくさんの小遣いがもらえるとの発言もあった。[38] 何ともちゃっかりした発言であるが、思春期の未成年ということを考えると、口うるさい親は敬遠したいのも、かれらの発達段階としては自然であり、上記の発言も一定程度真実の声であろうと思われる。それでも、出稼ぎに行くのを望まない理由として、両親が出稼ぎの仕事の最中に事故に遭うのではないかと心配したり、そうでなくとも苦労している両親にこれ以上苦労をかけたくないなど、親思いの理由をあげる子供もいれば、面倒を見てくれる人がいないのは嫌だという、より切実な声をあげる子供もいた。

表5　農村青少年の相談相手

単位：%

	農村留守児童		一般の農村青少年	
	学習面	生活面	学習面	生活面
先　生	67.0	35.0	61.3	18.7
友　人	24.1	27.6	28.5	42.6
家　族	6.2	3.5	7.8	37.4

出所：周林・青永紅等編著『農村留守児童教育問題研究』四川出版集団四川教育出版社、2007年、44頁より作成。

それでは、子供たちが日常生活の些事を含め、様々なことの相談相手にしているのは誰なのであろうか。

周林たちの調査を表にしたものを見ると(表5)、学習面に関してまず学校の先生[39]を相談相手としている農村留守児童は六七%。以下、仲の良い友人[40]二四・一%、家族六・二%となっている。また、日常生活の問題では先生が三五%、仲の良い友人二七・六%、家族三・五%である。いっぽう、親たちが出稼ぎに出ていない子供たちの場合は、先生の役割は学習面に重きがあり、当然ではあるが生活面では友人に相談する場合が一番多い。小中学生という年頃は、次第に親の手から離れて自我が形成される時期であり、家族とは別に友人との付き合いの比重が増してゆく。しかしながら、後述するように学校の寮で共同生活をする農村留守児童の場合、教員がかれらの親代わりとなっている状況があ

表6　天峰小学1、3、5年生の父母との電話連絡状況

	1年生		3年生		5年生	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)
週に1回	8	11.43	6	8.57	4	5.71
半月に1回	25	35.71	21	30.00	15	21.43
1か月に1回	33	47.14	38	54.29	42	60.00
2か月に1回	3	4.29	4	5.71	7	10.00
2か月以上に1回	1	1.43	1	1.43	2	2.86

出所：周林・青永紅等編著『農村留守児童教育問題研究』49頁。

り、そうでなくとも信頼できる身近な大人として、子供たちが相談相手にまず最初に選ぶのが身近な学校の教員というのは順当な結果であろう。また親たちが出稼ぎに出ていない場合、表中の相談相手のうちの家族には父母が含まれることになり、農村留守児童とは条件が異なってくることにも留意しなくてはなるまい。この調査を行った周林たちもコメントしていることであるが、「留守児童を保護監督する者の、留守児童の学習や生活などの問題に対する関心が低い[41]」結果、父母が保護監督を依頼したはずの祖父母などを、子供たちが相談相手にしていないことがうかがわれる。これは、先にあげた全国レベルの報告において指摘されていた、農村留守児童を保護監督するケースが多い祖父母の教育水準が低いこととも関連するとも考えられる。しかし、祖父母もその地での毎日の生活があるからには、四六時中孫の世話ばかりするわけにはいかず、また子供たちから見れば祖父母では世代間のギャップが大きくて話が通じないという現実があるのではないだろうか。すでに示した例[42]ではあるが、一日中武侠小説を読みふけっているくらいならともかく、ネットカフェなどが祖父母の生活の中になじんでいるとは考えられない。

それでは、子供たちと出稼ぎに出ている親たちとの連絡状況はどれほどの頻度で保たれているのであろうか。

表6は一例であるにせよ、合計七〇人の児童の抽出調査であり、一定の傾向は出ていると見てよかろう。低学年の場合でも半月に一度、中学年・高学年になるとひと月に一度ということになる。電話は簡便であるが通信手段としては比較的値の張るものであり、それが携帯電話となると飛躍的に費用がかさむ。親たちが南充市や省外に出稼ぎに出ている場合、市外通話になるわけであり、基本料金を払えば無料通話となる市内通話とは通話料金は比較にならない[43]。この表では一通話あたりの時間が記されていないが、現金収入に乏しい農村であれば、また少しでも多くの現金を持ち帰ろうとする出稼ぎの父母にすれば、高価な通

信手段といって差し支えあるまい。そのため、電話という手段が金銭的に無理であれば手紙になろうが、親子ともに文章を書くことが習慣化されていなければ、手紙によって意思疎通を行うことは想定しにくいし、また困難である。そうなると、農村に残った子供たちと出稼ぎ先の親たちとのコンタクトは、必ずしも円滑に行われているとはいえないことになる。

こうした家庭環境また親子の結びつきの結果として、子供たちは充分に愛情を注がれて育っているとはいえず、自分は教育水準が低くとも子供たちに学習の習慣がつくように促したり、社会性を持つように仕向ける家庭教育の面でも、親たちのケアは期待できない。そのため、農村留守児童に対する教員の評価は芳しいものではない。高坪区の教員たちの間からは、父母が出稼ぎに出ている子供たちの学習指導がそうでない子供たちに比べて難しい八七・四%、親が出稼ぎに出た後に、子供の成績が下がった七八・六%、不道徳になった七四・八%、校則違反が増えた六八・七%、性格が卑屈になった四六・四%、ほとんどの留守児童は情緒的に問題がある七二・八%、子供の心理に問題が起きた五八%、という数字が評価としてあがっている。教員という立場からの見方であるが、後述するようにこの地域の教員たちの中には農村留守児童のために熱心な取り組みをしている者も多数おり、こうした数字は子供たちをさげすんだ見方に由来するものではない。したがって、これらは現場の教員たちが日常的に接している農村留守児童に対する、率直な見方と考えられよう。

さらにもう少し具体的にいくつかの事例をあげてみたい。教育は個別の子供たちひとりひとりに対する営為であり、統計処理では隠れてしまいかねない問題を実例の中から見いだすことができよう。

〔事例1〕

小麗（仮名）、女子、父母ともに省外に出稼ぎ。父方の叔母の家に寄宿。学級担任の説明では、小麗は初めは成績が良好であっただけでなく、非常に聞き分けが良く、賢く可愛い子供で、先生にも同級生にもみんなに好かれていた。しかし、両親が出稼ぎに出た後、彼女の性格は変わってしまった。性格は独り善がりに、行動も目立ちたがりになって、世間でいうよからぬ連中の仲間に次第に入るようになり、「ボーイフレンド」[44]と付き合い、義姉妹[45]の乾分（こぶん）となってしまった。[46]

〔事例2〕

小双（仮名）は六年生の時父親が省外に出稼ぎに行き、中学一年の時には母親も父と一緒に出稼ぎに出て行ってし

まった。両親が行ってしまった後、小双は父方の叔父の息子と一緒に父方の祖父母の厄介になることになった。両親揃っての出稼ぎから二年少したって、小双はとても大きく変わってしまった。授業をサボるのはいつものこと、盗みやスリまでするようになり、同級生たちはみな小双と遊びたがらなくなって、かれの性格もますますひねくれてしまった。[47]

これらは、南充市高坪区の長楽初級中学[48]での事例である。同校の校長の話では、「学習成績が芳しくないのは農村留守児童の教育問題の一部に過ぎず、より心配なのはかれらの品行の育成と心理面での善導である。校則違反をした生徒の八〇%が留守児童である[49]」という。学校で問題を起こす生徒の多くが農村留守児童であることを、現場の声としてあげているのであるが、その原因は、〔事例1〕〔事例2〕を見れば両者に共通するのは家庭環境の変化である。要するに両親が出稼ぎに出てしまうことによって、子供たちはきちんとした保護監督者を失うはめになり、その結果心身ともに成長途上の子供たちが悪に染まってしまったのである。小双のように犯罪行為に手を染めたり、小麗のように不純異性交遊まがいのことをしたりと一見非行あるいは不良行為をするのである。しかしそれは、肉親の愛情を得られないが為の代償行為であり、他人に認めてもらいたいが為の行動であり、救いを求める叫びだともいえる。思春期前期にあたるこの年頃では、子供たちが自立して生活することはまず無理な相談であるし、二親のきめ細かな、そして適度な距離を置いた保護監督が必要なことはいうまでもない。その遠巻きの、愛情ある庇護のもと次第に大人へと成長するのであるが、それまで日常的に存在していた肉親の愛情に基づく訓育が失われれば、われわれが常識的に想定できるような、本人たちにとって芳しくない状況が現出することになる。

小　結——対策と効果——

四川省南充市高坪区では、問題行動を起こしがちな農村留守児童に対して、様々な取り組みが行われている。それらは、周林らの記すところによれば、いずれも子供たちに直接接する教員たちの献身的な努力に依存している。そのいくつかの事例を紹介し、問題解決の道を探る手がかりとしたい。

南充市安岳県横廟郷の九年制義務教育学校の事例である。[50]農村の義務教育課程の学校の多くと同じく、通学に不便な地域を抱えているこの学校でも寄宿制をとっている。児童生徒の留守児童情況に関して詳細な説明はない

が、しかし近隣の多くの農村と同じく、親たちが出稼ぎに出ているために、土日に帰宅することができない子供たちが多く、農村留守児童となる子供たちが多いことに変わりはないことは容易に想像できる。学校では、そうした農村留守児童寄宿生に対して、「宿舎内文化活動」[51]と称して、放課後の児童生徒の生活を豊かにしようと、寄宿舎内の生活規律の制定、「宿舎生活行動記録」[52]制度、児童生徒の自発意思に基づく学年別居室および居室の命名、居室間競争、居室単位での弁論大会など、様々な試みが行われている。その具体例をあげてみよう。

二〇〇二年秋、新学期が始まってまだ三週目、寄宿舎の新入生[53]がひとりで、あるいは二、三人連れだって、消灯後、舎監の先生の目を盗んで屏を跳び越え、校外に出る騒ぎがあった。先生たちはそうした子供たちを捕まえ、冷静に話を聴くと、多くの子供たちが寄宿舎は家とちがうので眠くならない時にはブラブラしているだけなのに、先生たちは些細な問題を大げさに考えている、というのだった。乱暴に手厳しく対応すれば解決する問題でないことは明らかだった。学校側はまず敷地を取り囲む屏を高くし、屏によじ登れるようなものをすべて取り除き、生活規律への賞罰制度を整え、夜間外出時に起きうる危険について説明を繰り返すいっぽう、宿舎内での文化活動を活発化させた。例えば、就寝前の三〇分を利用して歌を歌ったり楽器を弾いたりさせて子供たちの一日の精神的な疲れを癒し、床に入ったら一〇分間の一日の反省を実施したのである。こうした活動開始後まもなく、夜間外出は基本的に起こらなくなり、大部分の児童生徒は迅速かつ静粛、時間通りに寝るようになったという。

これは、子供たちと直接接する教員の、寄宿舎での努力に依存している解決策であり、子供たちの自主性育成の事例[54]をふくめ、教育という営為による農村留守児童問題の解決を図ろうとしているのであるが、問題の本質的な解決にほど遠いことは一目瞭然である。根本的には、出稼ぎに行かなければ多少なりであれ生活が向上しないように貨幣経済、市場経済の中に組み込まれた農村の姿があるからである。南充市の教員たちもそうしたことに気付いているのであり、子供たちと出稼ぎ先の親たちとの間の緊密さを取り戻すために「親情電話」[55]を設け、農村留守児童に使わせている事例[56]など、少しでも状況に風穴を開けようとしているが、やはり問題の根本的な解決に至らないことは同様である。それでも、教員としては目の前の子供たちと格闘し続けるのであり、安岳県の教員たちは課外活動を活発に行い、学校施設を日曜休日にも開放するなど[57]、いったいいつ休むのか、過労で倒れてしまわないのか、とかえって心配

になるくらいである。

農村留守児童の問題の根幹には現在の中国が抱える格差が横たわっており、それは個人的な努力で解消されるようなものではない。農村留守児童が存在する地域社会と学校との協力、教育部門だけでなく地方から中央に到るまでの関連行政部門の、少くとも現在より子供たちをとりまく状況が悪化することのないよう、きめの細かい政策とその実施が望まれよう。そして本質的な解決が可能となるような社会への移行が、望まれよう。

注

〈1〉 漢語では「戸口」であり、日本の概念では住民票に近いが戸籍と訳すことが多い。原義を必ずしも正しくは伝えていないが、慣用となっているので「戸籍」と訳す。

〈2〉 拙稿「現代中国の中等教育——二〇〇三年図們市の事例から」(『紀要』愛知大学国際問題研究所、No. 132、二〇〇八年九月)など、参照。

〈3〉 「全国農村留守児童状況研究報告発布」(『中国教育報』二〇〇八年二月二九日原載、http://www.cdedu.gov.cn/news/Show.aspx?id=14526)。全国婦女連合会『全国農村留守児童状況研究報告』(重慶徳育網 http://www.cqdy.com.cn/dyky/ShowArticle.asp?ArticleID=4076)。同報告では、「二、我国農村留守児童的総体現状与基本特徴」のなかの「1、農村留守児童的総体規模和発展変化」では「そのうち一四歳以下の農村留守児童は約四千万人以上」、「2、農村留守児童的結構和分布」において「そのうち義務教育段階の農村留守児童は約三千万人以上」としている。

〈4〉 中華人民共和国国家統計局『二〇〇五年全国一%人口抽様調査主要数据公報』二〇〇六年三月一六日(http://www.stats.gov.cn/tjgb/rkpcgb/qgrkpcgb/r20060316_402310923.htm)。

〈5〉 二〇〇〇年一一月一日付で第五次全国人口普査が行われた。そこでは、全国の人口一二億一〇七〇万人のうち、一八歳未満の未成年「流動人口」は約一九八二万人、全「流動人口」中の一九・三七%、六〜一四歳の義務教育学齢児童生徒が未成年「流動人口」の四三・八%、約八六八万人を占め、一五〜一八歳は二八・八%、約五七〇万人であった(周林・青永紅等編著『農村留守児童教育問題研究』四川出版集団四川教育出版社、二〇〇七年、四二頁)。日本の高等学校にあたる高級中学段階は中国でも義務教育段階ではないが、若年「農民工」問題が発生していることは容易に想像できる。なお、上記の数字から、六歳未満、すなわち学齢以前の幼児の割合は二七・四%、約五四四万人となり、都市部に流入した学齢児童の問題でさえ解決が簡単でないのであるから、保育に欠ける幼児が大量に発生していることもまた、容易に想像される。

〈6〉 この点に関しては、拙稿「中国の教育体制改革——中等教育の改革と問題点」(『アジア経済』第二七巻第八号、

一九八六年八月)、「改革・開放期における中国の教育体制改革について――初等教育の普及と課題」(『アジア経済』第三七巻第七・八号、一九九六年八月)、「中等教育の現状と課題――『素質教育』の展開」(小島麗逸編『中国教育の発展と矛盾』御茶の水書房、二〇〇一年七月所収、「教育のあり方から見える中国社会のいま――牧野篤『中国変動社会の教育――流動化する個人と市場主義への対応――』(勁草書房)を読んで」(『中国研究月報』二〇〇八年一月号 Vol. 62 No. 1(No. 719))など参照。複線型学校体系とは、戦前日本の学校体系を想起すればよく、効率的に人材を育成しようというマンパワー計画に力点をおく為政者には、魅力的に見えよう。しかし、それが社会的怨念にまで高まる可能性をもつ個人個人のルサンチマンを包含していることは、看過し得ないものであろう。

〈7〉 南亮進・牧野文夫・羅歓鎮『中国の教育と経済発展』東洋経済新報社、二〇〇八年。

〈8〉 阿部洋編著『「改革・開放」下中国教育の動態』東信堂、二〇〇五年。これは、阿部氏を中心に、中国側は南京師範大学教育学院と共同で進められた科研費研究の一環である。

〈9〉 保母武彦・陳育寧『中国農村の貧困克服と環境再生――寧夏回族自治区からの報告』花伝社、二〇〇八年。これは、島根大学と寧夏大学との学術交流二十周年記念の出版であり、共同研究として進められたものの成果である。

〈10〉 前掲牧野篤『中国変動社会の教育――流動化する個人と市場主義への対応』。しかし、本書はデータの扱いや分析視角に問題があり、さらに上海における農民工が地域社会に受け入れられている事例をあげるが、二〇〇七年一月には普陀区にあった安徽省出身の農民子弟を集めていた学校が同区教育局によって授業中にもかかわらず子供を追い出し、教員を集めて学校の閉鎖を宣言するというように、暴力的に閉鎖に追い込まれたことがあるなど(「上海普陀区叫停民工子弟学校 数百人強行封校」新浪網二〇〇七年一月八日、『新安晩報』からの転載。上海の出来事が、上海でではなく農民工を送り出した安徽で最初に報道されている点も、ゆるがせにはできないことであろう)、決して楽観視できる状態ではないはずである。牧野本への具体的な批判は、前掲拙稿「教育のあり方から見える中国社会のいま――牧野篤『中国変動社会の教育――流動化する個人と市場主義への対応――』(勁草書房)を読んで」参照。

〈11〉 前掲『農村留守児童教育問題研究』。

〈12〉 汪明『聚焦流動人口子女教育』高等教育出版社、二〇〇七年。

〈13〉 張強・張歓・鐘開斌・朱琴・蘇芃『農村義務教育――税費改革下的政策執行』中国社会科学出版社、二〇〇四年。

〈14〉 楊豪『中国農民大遷徙』浙江文芸出版社、二〇〇七年。

〈15〉 「光明観察」は『光明日報』が運営する「光明網」の関連サイト。中共中央の意向が反映している。

〈16〉 王艶偉「留守児童的寒暇生活不容忽視」（一二月二四日付「中国教育新聞網」（http://www.jyb.com）。「光明網」からの転載。
〈17〉 原文「黒網吧」。
〈18〉 李小君「調査顕示：農村留守児童学習生活存在五大問題」（『人民日報』二〇〇七年一一月一日、「中国教育新聞網」転載）。
〈19〉 記事によれば、この写真展は周口市のプロアマ多くの写真家が三か月以上にわたって撮影した百枚以上の写真が展示され、そこには「特困〝留守児童〟」五〇人のありのままの姿が映されていたという。
〈20〉 前掲『全国農村留守児童状況研究報告』。
〈21〉 中国の社会格差が年々深刻化していることはいうまでもなく周知の事柄であろうが、これに関して総花的ではあるが概観に適したものとして園田茂人『不平等国家中国——自己否定した社会主義のゆくえ』（中公新書、二〇〇八年）がある。統計調査結果などを多用し、理解を助けている。
〈22〉 以下の省名に関わる言及に関しても、いずれも具体的な数値はあげられていない。
〈23〉 これら以外にも、江西・湖北・貴州・江蘇が農村留守児童の多い省としてあげられている。また、広東・江蘇は省内での労働力移動が原因で農村留守児童が発生しているとするが、それは経済的に発展した都市を多く抱えているためと考えられる。
〈24〉 なお、例外的に女児の方が多い地域として、北京・上海・内モンゴル・寧夏・新疆があげられている。理由に関してはここでも説明がない。回民・回族であれば女性を外に出すことを忌避する傾向があることは知られており、それゆえであろうか。また、北京・上海は大都市の周辺の農村部に関してであり、別の考察が必要であろう。
〈25〉 祖父母が、父方なのか母方なのか、不明。
〈26〉 周知のことであるが、中華人民共和国において「義務教育法」が制定されたのは一九八六年であり、それまでは高等教育は学費無料であったのに対し、初等中等教育は有料であった。ちなみに、中華民国時代には、実施のレベルには地域差があるものの、義務教育制度が施行されていた。
〈27〉 愛知大学への中国人留学生からの聞き取りによる。
〈28〉 ただし、この表は理解しにくい項目を含んでいる。例えば、未就学者や在校者、中途退学者の割合は理解できるにしても、卒業者の割合を同列に並べてあるのは、どのように考えればよいのであろうか。
〈29〉 国家統計局編『中国統計摘要 二〇〇八』中国統計出版社、二〇〇八年、一八六頁。
〈30〉 原文「土地承包者」。
〈31〉 男子と女子とでは就業形態にも差があり、農業は男子が多く、私営企業で働くのは女子が多い。また、雇傭されるのは女子が多く、個人営業主となっている者は男子が多い。

〈32〉 前掲『農村留守児童教育問題研究』。
〈33〉 南充市人民政府のホームページによる（http://www.nanchong.gov.cn/article.php?id=1354）。
なお、二〇〇一年末現在、南充市政府所在地の都市人口は四九万人、うち非農業人口は四一万四一〇〇人、農業人口は一万六一〇〇人、常住流動人口すなわち南充市の都市戸籍を持たない常住人口は五万九八〇〇人、都市面積は三九・〇平方キロメートルである。
〈34〉 原文「川北〝絲綢之郷〟、〝柑橘之郷〟、〝冬菜之郷〟」。
〈35〉 南充市高坪区人民政府ホームページより（http://www.gaoping.gov.cn/article.php?id=130）。なお、高坪区には回族・ミャオ族・チベット族・トゥチャ族・イ族・満洲族・ワ族・リー族・メンパ族・ヤオ族・チノー族・チワン族・プイ族・トン族・リス族・ナシ族・チャン族・モンゴル族・ヌー族・キン族など二〇以上の少数民族が居住しているが、多くが漢族と通婚して高坪区内に移り住んだもので、区内各地に分散して居住している（http://www.gaoping.gov.cn/article.php?id=292）。
〈36〉 高坪地区の農村留守児童の概況に関しては前掲『農村留守児童教育問題研究』四三―四五頁。なお、これらは、『南充市高坪区〝留守児童少年〟教育問題的調査報告』に基づく、との原注四三頁がある。これは、二〇〇二年春、四か月をかけて南充市高坪区教育局が行った調査で、高坪区全体の農村留守児童に対して全体調査・抽出調査・アンケート調査・個別の聞き取り調査を組み合わせたもので、回収したアンケートは一万一千件以上、聞き取りは三百人以上に対して行われた（同前書、四二頁）。これが『南充市高坪区〝留守児童少年〟教育問題的調査報告』にまとめられたわけである。
〈37〉 子供たちの中には、自分の両親がどこに出稼ぎに行っているのかわからない者が六・五％いたという。
〈38〉 中には、何とも思わない（原文「無所謂」）と言った子供もいたという。これは、本文中にも指摘したが、一種退廃した状況ともいえよう。
〈39〉 原文では「教師」「老師」としてあるだけであるが、後述するように農村留守児童を寮生として世話をするケースも多く、また農村で学校の先生以外に子供たちから見た先生はいるとは考えられないので、本文のように記述した。
〈40〉 原文「同伴」。表中では煩瑣になるので「友人」と表記した。
〈41〉 前掲『農村留守児童教育問題研究』四四頁。
〈42〉 王艶偉、前掲論文。
〈43〉 筆者は、二〇〇七年四月～二〇〇八年三月の間、在外研修として北京に滞在していたが、その間、他省の友人などに連絡を取った時、プリペイド式の携帯電話の場合、一〇〇元が数時間で無くなったことを記憶している。また、中国の携帯電話は音声通話もショートメールも、受信する側でも料金が発生する。このことも、気軽に電話を使えない理由となっていると思われる。

〈44〉 原文「男朋友」。
〈45〉 原文「干姐妹」。
〈46〉 前掲『農村留守児童教育問題研究』七六頁。
〈47〉 同右、七七頁。
〈48〉 長楽初級中学は、教育面では比較的良好な学校であり、全校生徒一三〇〇人、うち留守児童は五一六人。ほとんどが父親単身の出稼ぎであり、母親が出稼ぎに出ているのは一・五%、両親ともに出稼ぎに出ているのは三〇・五%（前掲『農村留守児童教育問題研究』七六頁）。
〈49〉 同右、七六頁。
〈50〉 同右、一九二―一九四頁。なお、九年制義務教育学校は、小学六年に初級中学三年が加わったもの。
〈51〉 原文「寝室文化建設」。
〈52〉 原文「寝室生活個人檔案」。
〈53〉 小学生なのか中学生なのか記述はない。
〈54〉 前掲『農村留守児童教育問題研究』一九八―二〇〇頁など。
〈55〉 原文のまま。「親子の情を通い合わせる」の意と解釈した。
〈56〉 前掲『農村留守児童教育問題研究』九七―九八頁。
〈57〉 同右、一九一頁。